

# 中国語を母語とする日本語学習者における 漢語習得研究の概観

## —意味と用法を中心に—

陳 篤敏

### 要 旨

本稿は、これまで行なわれてきた中国語を母語とする日本語学習者の漢語の意味・用法の習得に関する対照研究、誤用分析研究を概観し、第二言語習得にどのような貢献をしたのか、またその問題点及び限界はどのようなものなのかを述べる。そして対照研究・誤用分析研究を応用し、一步前進した学習者の中間言語を見る研究を紹介する。さらに、最近言語心理学で行われている新しい研究を取り入れ、今後の中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得研究に新しい方向性を示したい。

本稿の具体的な目的は、中国語を母語とする日本語学習者を対象とする日本語の漢語習得研究の位置付けをすることである。その結果、中国語を母語とする日本語学習者を対象とする日本語の漢語習得の研究は、対照研究、誤用分析研究といったステップを踏まえて中間言語研究まで辿りついた。これまでの研究から、中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得において、母語の中国語から様々な影響を受けていることが予測された。そして現在は、予測された様々な母語の影響を検証している段階にある。

【キーワード】第二言語習得、 漢語、 母語の影響、 検証

### 1. はじめに

日本語の中では漢語が最も多く占められている。宮島(1993)の調査によると、時枝誠記編『例解国語辞典』は漢語が 53.6%を占めている。また、朝日新聞一ヶ月分の調査では、約 56%が漢語であるという結果も出ている(『言語生活』(1961))。従って日本語を学習する際漢語はなくしてはいけない項目である。中国語を母語とする日本語学習者の漢語学習においては、日中で字形が同じである同形語が多いため、学習者にとって大きな助けになっているようである。しかし、親しみを感じる一方、母語の中国語からの干渉が避けられないのも事実である。先行研究では、日中漢語の対照研究が多数行われていたが(文化庁 1978; 趙 1983; 張 1987; 柳 1997; 陳 2002 など)、漢語対照研究を習得研究に応用する研究はまだ少ない。また、日中漢語誤用分析研究は学習者の誤用に焦点を当てなかった。しかしながら、第二言語習得研究で誤用分析は学習者言語の一部しか診断できない、第二言語習得の過程の全体像をと

らえきれないという批判があった(長友 1993)。第二言語習得研究の L1 の転移において、習得の過程上に母語の影響が現れることが確認されている(馮 1993; 三浦 1997; 安 1999; 陳 2002 など)。中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得はまさにそうであった。初級日本語学習者が母語の漢語をそのまま日本語に持ち込むことは日本語の漢語学習を干渉する負の転移であるが、正の転移とも考えられる。最近、中国語を母語とする日本語学習者に初級段階で彼らにとって学習しやすい語彙、また幅広く場面で使用できる語彙を学習させるようという正の転移を教育面に応用する主張も出ている(松下 2002)。中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得研究において、母語と目標言語の意味や用法などの違いに目を向けているばかりではなく、正用といった正の転移、また転移の発生に関わる要因、プロセスなど内的メカニズムを解明する必要がある。

そこで、まず本稿で取り上げた漢語の定義と範囲を第 2 章で述べ、次に漢語の意味と用法を中心とし

第2言語習得研究のL1の転移という観点を、3章以降で論じたい。第3章はこれまで中心としてきた日中漢語の対照研究を個々の研究の目的によってまとめ、紹介する。第4章は学習者の誤りを実際に集め、分析した研究を扱う。第5章は学習者の中間言語で母語の影響を見た研究を述べる。第6章では最近言語心理学でされている研究を概観する。最後の第7章は、それぞれの研究から第2言語習得における貢献や限界などをまとめて論述し、第2言語としての日本語の漢語習得研究に対する提言や方向性を示したい。

## 2. 本稿で取り上げる「漢語」の定義及び範囲

「漢語」とは『言語学大辞典』では、「中国では中国語のことを言う。日本では、漢字で記される中国語起源の単語を漢語といい、また、漢字語とも言われる。この漢語に対して、日本語固有の単語を「和語」あるいは「やまとことば」と呼ぶ」と定義されている。従って「漢語」というのは、日本語の固有単語「和語」に対する中国起源の言葉を指す。つまり一般的に「漢語」は「和語」、「漢語」、「外来語」、「混種語」という4種類の日本語の語種の一種であると捉えられている。

本稿で取り上げる「漢語」は、従来語種の1つの「漢語」ではなく、まず定義は「二字または二字以上の漢字で構成された漢字語彙」とする。また、範囲として、

- ① 従来の「漢語」,例:「当然」。
- ②「和語」であるが、視覚上では漢字二字或いは二字以上構成される漢字語彙,例:「山田」(和語)。
- ③「和製漢語」,例:「火事」。
- ④「受け入れ」のような送り仮名の付いた漢字・仮名まじり語は国語辞書を基準にし、「受入」のような漢字だけの形のもの。

以上から、本稿で取り上げる「漢語」は、まとめてみると、「視覚上に二字または二字以上の漢字で構成された漢字語彙」と定義する。

## 3. 日中漢語対照研究

### 3.1 日中の漢語を分類する研究

日本語の漢語と対応する中国語の分類における代表的な研究は文化庁(1978)と言えるだろう。文化庁(1978)は、凡そ10冊の日本語教科書から2千語を取り出し、初めて日本語漢語と対応する中国語を

「S:Same」(意味が同じか、また極めて近いもの)、「O:Overlap」(意味が一部重なっているもの)、「D:Different」(意味が異なるもの)、「N:Nothing」(中国語に存在しない)という4種類に分類し、分析した。その結果、日中で意味の共通する語彙は全体3分の2にも及び、日本語にしか存在しない語彙が4分の1、意味が一部重なっているものと、意味が異なるものが全体の10分の1を占めた結果となった。その後、張(1987)は文化庁の分類に従い、1万1千語を収録する辞書を出版したが、「S」・「O」・「D」・「N」に関する全体的な割合は明記しなかった。また、同じ中国語であっても地域や、時代の流れによって中国語の意味が異なっているという観点から台湾の中国語も対象に入れ、改めて分類を試みた陳(2002)がある。結果として、同じ中国語であっても異なっていることが明らかになった。従って、教育現場に対して、同じ漢字圏の日本語学習者は同じ漢語を見て同じ意味を考えると限らないという示唆も得られた。その3つ研究のまとめを表1に示す。

日本語の漢語と対応する中国語の分類研究に基づき、日本語教育に応用する研究は、武部(1979)しか見当たらなかった。武部(1979)は、中級教科書の1つの課に出てきた漢語を取り出し、分類研究での「S」、「O」、「D」、「N」を基準にして漢語を分類した。その結果、150語の中で、「S」は108語(70%)、「N」は31語(20%)、「O」と「D」は合わせて11語(8%)であった。武部(1979)によると、すべての漢語はこの4種類に分けることが可能であり、「S」に分類される語は学習者が正しい理解に達することができ、教える立場でも問題がない。「N」に分類される語は中国語として理解できない。中級段階で「O」と「D」に分類される語は誤解が生じやすいので、教える際注意するべきであると述べている。

以上にこれまで日本語の漢語と対応する中国語の分類研究において、日中漢語の意味が共通するものが一番多いことから、中国語を母語とする日本語学習者にとって日本語の漢語の理解が日本語学習の際強い味方となると思われる。また、効率かどうか別として、日中語彙分類の辞書を手元に置き、日中語彙の違いに気をつけながら学習を進めることも1つの方法と思われる。さらに陳(2002)の研究からも教育現場の日本語教師は同じ漢字圏の学習者でも漢語が異なっていることに注意すべきであると示唆される。

表1 日本語の漢語と対応する中国語の分類研究

	語数	対照	S(同義)	O(類義)	D(異義)	N(欠落)
文化庁(1978)	2,000 語	中	2/3(66.67%)	合わせて 1/10(10%)	1/4(25%)	
張(1987)	11,000 語	中				
陳(2002)	4,600 語	中	54.5%	14.9%	4.1%	26.5%
		台	55.1%	13.3%	3.5%	28.1%

しかし、分類研究にいろいろな問題も存在している。特に文化庁(1978)の研究に対する批判が少くない(荒川 1979; 飛田・呂 1986; 周 1986; 大塚 1990 など)。最も批判されたのは分類が間違っていることである。例えば、中国語に存在する「意味」のような語彙は「N」(中国語に存在しない)に分類している(荒川 1979)。また、分類研究は意味を基準にして分類されたが、果たして妥当であろうか。例えば、文化庁(1978)と張(1987)の分類を比較してみると、分類が異なっている語彙が数多く見られる。特に「S」(意味共通)と「O」(意味が重なる)の部分である。例えば、「結局」という語が、中国語では、「小説の<結局>」、「悲劇の<結局>」<sup>1</sup> のように「結末」という意味で使用されているにも関わらず、文化庁(1978)で「S」に分類されている。従って、意味が共通であっても用法が異なる場合があるので、単純に意味のみで分類することはできないだろう。

その上、日本語の漢語と対応する中国語の分類は単語レベルでのみ考えられていた。実際に学習者が作文を書いたり、スピーチしたりする場合は、語彙の使用は単語レベルのものではなく、文レベルのものとなっている。品詞の差も無視できない。例えば、「連続」という語は日中で意味が共通しているが、中国語では副詞として用いられる。一方、日本語では名詞の他、「～する」のように自動詞で使用されなければならない。実際に学習者は「\*連続に」のような誤りを起こしている。従って、単語レベルの分類研究では、中国語を母語とする日本語学習者が、母語の中国語を利用して日本語の漢語が理解できても誤りを起こす原因が説明できない。

### 3.2 日中同形語における対照研究

これまで、日本語と中国語の同形語について様々な対照研究が行われてきた。そこでこの節ではまず日中同形語の定義を述べ、次に日中同形語の研究を同形同義語、同形異義語にわけ、概観する。それぞれの研究から中国語を母語とする日本語学習者に応用できるところも探ってみたい。

#### 3.2.1 日中同形語とは

大河内(1986)によると、「同形語とは双方同じ漢字で表記される語」、また三浦(1997)によると、「日中同形語とは、日本語と中国語に存在する同じ形を持つ漢語のことである」と述べられている。さらに、潘(1995)は同形語を判断する3条件を述べている。まず、①表記は同じ漢字であること。(繁体字や簡体字、また形容動詞の語尾など漢字ではない要因を考慮しない)、②同じ起源を持つもの、③中日両言語で現在使用されているものというものである。同形語の分類に関しては普通、同形同義語、同形類義語、同形異義語という3タイプに分けられることが多い(于 1995; 潘 1995; 柳 1997 など)。

ここでは、広く定義される大河内(1986)と三浦(1997)の定義に従い、同形語の研究を選び、述べたい。日中同形語の研究は、大まかに言って同形同義語、同形異義語2種類に分けることができる。同形類義語は大抵同形同義語か異義語のどちらかの範疇に入れられている。

#### 3.2.2 日中同形同義語に関する研究

同形同義語の研究では、日中の文法的ずれに焦点を当てている。つまり、同形同義語であるが、日中で品詞が異なるため、中国語を母語とする日本語学習者が上級になんでも誤りが起こるものである。具体的に例1を見ると、「発展」(石・王 1983)という同形語は、中国語では自他動詞(1中・2中)ともに用いられるが、日本語では自動詞(1日)にしか用いられない。他動詞用法(2日)を成立させるためには「経済を発展させる」のような使役形にしなければならない。このような日中間で同形同義のものは、学習者にとって意味が理解できても、正しく第2言語での品詞区分を学習していなければ、産出する際にL1の品詞で使ってしまう恐れがある。

#### 例1.「発展」

(1 中) 経済発展了。(自動詞用法)

(1 日) 経済が発展した。(自動詞用法)

(2中) 發展經濟。(他動詞用法)

(2日)\* 經濟を發展する。(他動詞用法)

日中同形同義語の品詞の違いによる文法的ずれの研究は、石・王(1983)、中川(1985, 1992a, 1992b, 1995)、侯(1997)、戚(1999)がある。中川(1985, 1992a, 1992b, 1995)の研究では、石・王(1983)の分類を参考したため、あまり異ならない。ここで主に石・王(1983)、侯(1997)、戚(1999)の研究を取り上げて、論じたい。その分類を表2に示す。3つの研究の分類基準はそれぞれ異なっており、比較することが難しいが日中間で同形同義語の品詞が大きくずれていることがまず確認ができる。石・王(1983)の研究方法は日中同形語50語を選んで北京日本語研修センタ

ーの学生20人（日本語学習歴は4年から6, 7年）を対象に品詞性に関するアンケートを行った。結果は例えば日本語は自動詞として使用されている「繁栄」を中国語の品詞の形容詞と書いたものが多かった(11人)。従って母国語の干渉が強いという結論が得られた。そのアンケートでは同形語が形動・副・自動・他動のような4種類にしか分類されていないため、石・王(1983)はさらに107語を選択し、7タイプに分類した。侯(1997)は翻訳に品詞の違いによる間違いがあると述べ、日中の同形語の品詞の違いについて考察し、8タイプに分類した。分類の基準は述べられなかったが恐らく中国語と日本語の双方向から考察しているのではないかと思われる。戚(1999)では、『三省堂国語辞典』(第4版)から782語

表2 日中同形同義語における品詞の異なり

研究	石・王(1983)	侯(1997)	戚(1999)
漢語数	107語	—	782語
分類	7タイプ	8タイプ	35タイプ
品詞(中)	品詞(日)	品詞(日)	品詞(日)
一 動詞			
他V	①名、②自サ+に格	自サ	①自サ、②他サ、③自他サ
自V	—	—	①自サ、②他サ、③自他サ
自他V	自サ	他サ	①自サ、②他サ、③自サ・形動
二 名	動	名・動	①自サ、②他サ、③自他サ
三 形	自サ	—	①自サ、②他サ、③自他サ
四 その他	中	日	中
			日
副形・他サ	自サ	副名・形	形・名
受動態動	形動	名・動	①自サ、②自サ・形動
	自サ	形・副	③他サ
	場所+ヲする	名	①自サ、②自サ・形動
		動	③他サ、④自他サ
		動	自サ
			他サ
			自サ
			自他サ
		連語	自サ
		連	他サ
		連	自サ
		連・自・名	
		副	自他サ
		副・形	
		助動	自サ
		助動・他動	

(3つの研究を参考に作成。中：中国語、日：日本語)

を取り出し、日中間の品詞のずれの異同を検討した。その結果、調査できないもの 162 語と品詞の認定に問題があるもの 27 語を除き、品詞のずれがないものは 376 語で総語数の 62.4% を占めており、ずれがあるものは 227 語、総語数の 37.6% を占めていた。また日中間の品詞のタイプ類は中国語のほうが遙かに多いと見られる。

以上の 3 つの研究から、日中同形語の品詞のずれがどれくらい大きいのかがわかる。しかし、品詞のずれが大きいからといって必ずしも難しいとは言えない。例えば、石・王(1983)の研究ではアンケートで調査を行なったが、具体的な数値を示していないため、正答と誤答の割合がはっきりしていない。そのアンケートを吟味してみると 20 名中 15 名以上が正解(70% 正解)のものも 26 語あったため、日中で品詞がずれても難しくないだろうと考えられる。また、日中で品詞がずれるものの中でも、難しいものと易しいものがあると思われる。例えば、石・王(1983)で同形語を 4 種類のみ扱っていたアンケートでは、中国語では形容詞、日本語では自動詞で用いられるものは正解が高いもの(15 名以上正解)が 20 語中 11 語(55%)、中国語では副詞、日本語では自動詞で用いられるものは 11 語中 4 語(36.4%)、中国語では他動詞・形容詞、日本語では形容動詞で用いられるものは 4 語中 3 語(75%)、中国語では自・他動詞、日本語では自動詞で用いられるものは 15 語中 8 語(53.3%) となっている(表 3)。

のことから、学習者にとって日中同形語の中で中国語では副詞、日本語では自動詞で用いられるものは難しく、中国語では他動詞・形容詞で日本語では形容動詞で用いられるものが易しいと予測が立てられる。石・王(1983)の調査対象者は 20 名と少なく、僅か 4 種類の品詞しか扱っていないため、全ての品詞の難易度を把握することが難しい。今後、日中の漢語の品詞のずれを研究し、より厳密な研究計画を立て、日中同形語の難易度を検証する必要がある。

### 3.2.3 同形異義語に関する研究

日中同形異義語に関する研究は、日中で同形である漢語を取り出し、1つ1つの漢語について意味や、用法の違いを究明するものが多数を占めている。(富田 1965; 守屋 1979; 趙 1983; 金 1987; 黄 1994; 柳 1997; 林 1998)。日中間で字形が同じであるが、なぜ意味が異なっているのかを探求している研究は

表 3 石・王(1983)で 4 種類の品詞の正答率

中	日	正答率(15 名正解)
形	自サ	55%
副	自サ	36.4%
他・形	形動	75%
自・他	自サ	53.3%

(石・王(1983)のアンケートを分析したもの)

潘(1995)である。潘(1995)によると、その理由は 2 つあり、その 1 つは漢語自体が借用、時代、社会生活によって変化しているからである。

まず借用によって変わった漢語である。例えば「道具」という漢語は元々日本人が英語を訳した語であるが、日本語では広い意味で使われている。しかし、その漢語が中国に入った現在にいたっては「演劇或いは映画に使う道具」という意味しか残っていない。他にも借用の時間によって変わった漢語がある。例えば、「敷衍」という漢語は元々中国から日本に伝わったものであるが、現在日中間でそれぞれ意味が異なっている。その変化は 4 段階に渡っている。①「敷」は「散布」の意、「衍」は「水が流れ広がる」の意である。②「述べ広げる」の意である。③自分の言うことや行為に責任を取らないこと。④ものや人に対していいかげんにやること。日本語は②の段階にとどまり、中国語は③と④へと変化した。

また、社会生活の変化によって変わったものも見られる。例えば「検討」という漢語は日本語の場合、元々の意味の「問題となる事柄について、いろいろな面からよく調べ、それでいいかどうかを考えること」という意味をそのまま使い続けてきた。一方中国語の場合、唐宋時代に「研究する」という意味が生まれ、現代の三、四十年代に中国の解放区で「分析する」という意味が派生され、そして「批判する」にいたって、それが中国全土まで広がった。しかし、台湾・香港・マカオなどは「研究する」という意味がそのまま使用されている。

もう 1 つは、漢語以外の要素である。例えば、読みによって意味が変わったものである。特に日本語には 2 つの読みが用いられるものが多く見られる。例えば、日本語の「作物」という漢語は読みが 2 通りがあり、「サクモツ」と読む場合は農作物を指しているが、「サクブツ」と読む場合は絵や彫刻品などの作品を指している。

他にも古代の漢語の意味がそのまま中国語或いは日本語のどちらかに保存されるなどである。例え

ば、「顔色」という漢語は古代の漢語の意味の「感情を表している顔つき」がそのまま日本語で保存されているが、中国語では、<顔>の意味がなくなり、現在の「色」という意味となった。

日中同形異義語を数多く取り上げ、日中の意味を並べ一冊の本にまとめたのは、金(1987)と林(1998)であった。特に同形類義語について日中間での意味、用法、文体や、語感などを論じているのは柳(1997)である。守屋(1979)、黄(1994)は、日中間同形異義語をタイプ別に分類し、比較をした。例えば、黄(1994)は、日中の同形異義語を名詞と動詞に分け、日中朝の漢字語彙を「完全異義」なもの、「部分異義」のものという2タイプに分類し、比較した。

また日中間で漢語の意味範囲を究明する研究は三浦(1984)がある。三浦(1984)は日中間で同形である漢語を取り出し、それぞれの意味範囲を比較した。対象となる漢語はすべて日本語から中国語に入ったものである(実藤 1973)。比較した結果が、4グループに分類されている。その分類及び用例を紹介したい。

#### (1)意味がかなり又は非常に違う単語

例:「新聞」。日本語の「新聞」は中国語で「ニュース」という意味であり、<現在報告新聞>は「今ニュースを申し上げます。」という意味で用いられる。

#### (2)意味がある程度重複しているが、日本語には中国語にない意味があり中国語には日本語にない意味がある単語

例:「単位」。「数量の基準」の意味の「単位」は中国語でも同じように用いられる。しかし、日本の大学生が「あと3単位で卒業できる」などという言う時の「単位」は、中国では<学分>である。一方、中国語の<単位>は<回到单位去>(それぞれの部署に帰って行く)のように部署の意味もある。

#### (3)意味がある程度重複しているが、日本語のほうが意味範囲が広い単語

例:「現金」。「キャッシング」の意味の「現金」は中国でも<現金>で用いられるが、日本語の「現金な人」のような使い方は中国語にはない。

#### (4)意味がある程度重複しているが、中国語のほうが意味範囲が広い単語。

例:「意見」。中国語の<意見>には「意見」という意味のほか、<意見甚深>(意見の食い違い)という意

味があり、また<大家對你意見很大>(人々は君に多くの不満を持っている)という「不満、批判」の意味もある。

以上、同形異義語に関する研究を概観した。それらの研究より、日本語と中国語で時代の変遷や生活地域などの要因、またお互いの交流を通じて、漢語の意味が変わったりしていること、そして日本語と中国語で同形異義語の意味範囲も異なっていることが示唆された。中国語を母語とする日本語学習者にとって、両言語で単語の意味の複雑さをクリアしてはじめて、文レベルまで達することができる。日中で同形異義語の意味的な相違を辞書としてまとめたもの(金 1987; 林 1998)があるが、毎回辞書を引きながら意味の違いを確認することがあまり効果的ではないため、教育現場に応用できるものが限られている。そこで1つの提案として、中国語を母語とする日本語学習者に日本語の漢語を教授する際、まず日本語と中国語で意味範囲の異なるものを図式で提示し、その授業で勉強した漢語を宿題として調べてもらう工夫をすれば、より印象深くなり、母語の干渉も最小限に收められると思われる。例を図1に示す。

例:「現金」という日本語は、日本語でも中国語でも「キャッシング」の意味で用いられるが、日本語には「現金な人」のような使い方もあるので、中国語に比べ、意味範囲が広い。

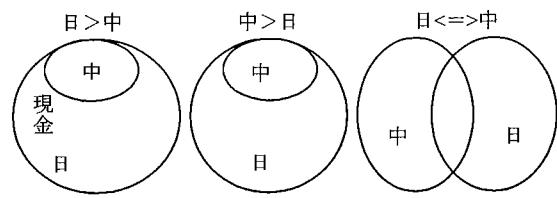


図1 日中漢字語彙の意味範囲

#### 3.2.4 由来、構造に関する研究

日中漢語の由来を究明する研究もあった。日本語の漢語は、昔中国から伝わってきたものが多かったたが、日本から中国に伝わったものもある。明治維新後、日本から中国へ入ったものもある。その漢語の起源を述べたものは、望月(1974)、沈(1993)、荒川(1998)である。中国語であるが、日本から入ってきたものとして数をまとめた望月(1974)では、日本語からの借用語として91語を挙げている。例えば、

場合、表現、経験、記録などである。また、西欧語の意訳語がまず日本において大量に作られ、中国語でその漢語を外来語と意識せずに、そのまま中国語として借用したものがある。例えば、借方、貸方などである。そして、もともと古代中国語にあった語を日本人が西欧語の翻訳語を作る際に意味を換えて使用したものを、逆に中国語が借用したものもある。例えば、文明、革命、会計、唯一などである。このような漢語の研究は、漢字・漢語が中国から伝来したというイメージを崩し、中国に逆輸出したものもあることがわかり、興味深い。

さらに、日中二字漢語の構造も研究されている。日本語の二字漢語の構造を究明する理由としては、日本語の中で漢語が最も多く占められていることがある。また、中学校教科書の調査によると、頻度が高い語の中で二字漢語が数多く見られるからである(国立国語研究所 1987)。

日本語の二字漢語の構造を究明する研究には野村(1988)がある。野村は、漢字一字で表記される最小の意味を持った単位を「字音形態素」と呼び、それを「語基」と「接辞」にわけ、語基をさらに①体言類語基<N>(例:客・駅・気・海…)  
②相言類語基<A>(例:急・新・独・異…)  
③用語類語基<V>(例:接・帰・集・欠…)  
④副言類義語<M>(例:最・再・予・必…)  
のようないくつかの種類にわけた。そして、日本語の二字漢語の結合パターンを以上の基準に沿って分類した。

日本語と中国語の二字漢語構造を分類し、比較する研究には荒川(1988)、荒川他(1992)がある。荒川他(1992)は、野村(1988)の二字漢語構成要素の定義に

従い、中国語の二字漢語の結合パターンを分類し、野村の研究との比較を試みた。野村(1988)は『新選国語辞典(第6版)』の二字漢語を研究対象とし、荒川他(1992)は、中国の『新詞新語新義』(沈孟慶 1987)を研究対象とした。その結果を表4に示した。表4より、日中ともに連体修飾が最も多く占められている。日本語の連体修飾において、「N+N」は「A+N」の2倍であるに対し、中国語では、「A+N」は「N+N」よりも少しあった。

日本語と中国語の漢語の字順の逆転現象に関する研究では、武部(1967)、周(1983)、竹中(1988)、荒川(1988)などがある。日本語と中国語の漢語語素の逆転現象について、中川(1995)によれば、中国語では動作の発生順に並べる傾向が優先されるのに対し、日本語では母音形態素が子音形態素より前に来る、話者から離れる意味の形態素が近づく意味の形態素より前に来るという現象が見られる。例えば、中国語ではく買売・迎送となるのに、日本語では「売買・送迎」となる。竹中(1988)は特に日本語と中国語の漢語の字順の逆転現象の原因を述べている。周(1983)は語構成という面から日中語彙を5タイプに分け論じている。研究方法は、日中二字漢語の中で意味がほぼ同じであるが、語素の順序が逆になっているものを取り出し、品詞によって分類するというものである。周(1983)の分類を表5に示す。

周(1983)は、逆転した漢語の使用について、中国語は口語でも、文章語としても、使われるが、日本語のほうはその殆どは文章語であると指摘している。語素の逆転現象の原因について竹中(1988)の研究に少し触れたい。なぜ日本語と中国語の字順が逆転する現象が起るのか。原因ははっきりされていないが、

表4 日中二字漢語の構造

		日本語			中国語		
	種類	%	例	種類	%	例	
1	連体	N+N	30.4	牛乳	14.3	廠規	
2	連体	A+N	15.6	悲劇	17.7	短線	
3	並列	V+V	10.9	破壊	12.2	展銷	
4	補足	V+N	8.6	登山	17.7	尋根	
5	連体	V+N	6.5	造花	4.1	飛碟	
6	並列	N+N	6.3	状況	6.1	班組	
7	連用	A+V	4.2	新任	2.7	嚴処	
8	並列	A+A	3.8	温暖	3.4	珍惜	
9	連用	V+V	3.8	競泳	12.9	選購	
10	補足	N+V	2.9	地震	2.0	打倒	

(表3は荒川ら((1992):77)を修正したもの。「・」並列、「+」修飾を表す)

表 5 二字漢語の逆転現象

		中	日
1	V+V→V	搬運	運搬
2	A+A→A	和平	平和
3	N+N→N	階段	段階
4	A+A→N	痛苦	苦痛
5	V+V→N	設施	施設
6	その他	威脅(N+V→V)	脅威(V+A→V)

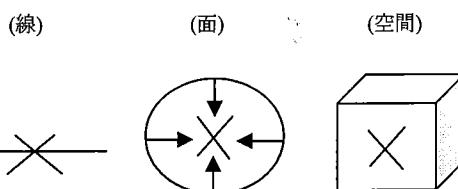
(周(1983:19)を修正したもの)

竹中(1988)の推論によると、「江戸時代に蘭学、洋学の翻訳が進められ、新しい概念を表すために中国語の借用が行なわれた。その場合、故意に字順を逆転させて新語とした例もある。また、明治初期の漢語流行の中で、漢字使用の混乱が生じ、意味の変化の少ない並列構造の漢語に逆転現象が現れた」(p.63)としている。

そこで逆転する漢語に関する研究に 1 つの提言をしてみたい。日中間で逆転する漢語の使用差異はかなり違っているため、辞書に載っていても普段使われていないものもあるし、両方使用されているものも見られる。例えば、「平和」、「和平」は日中ともに辞典に掲載されているが、戦争がなくて世が安穏であることは「平和」を使い、「和平」はやわらぎ、穏やかな意味として使用されている。従って、どちらかよく使用されているかといった頻度や、意味的にはどちらの普遍性が高いか、そしてどのような言葉と一緒に使われるのか、のような情報も加えることが学習上に必要である。

### 3.2.5 同形語辞典に関する研究

日中の同形語辞典に提案を試みた研究に大塚(1990)がある。大塚は、日本語の同形語辞典の作成の際に両国語の類似点と相違点の記述と、その類似点や相違点を視覚的に表現した図を入れることを提言している。例を図 2(大塚 1990:334)に示す。



(中) <中間> <中間> <中間>  
(日) 「中間」 — —

図 2 「中間」という漢語の図式

図 2 が示すように中国語の“中間”は 2 つの点の間、面、空間に使われるが、日本語は 2 点の間の意味しかないので、文字より図式で示したほうがより効果的だと主張している。

中国語を母語とする日本語学習者にとって、日中の類似点と相違点を図式で表されていると、言葉で理解しにくいものが確かに分かりやすくなる。しかしながら、全ての同形語が図式で表現できるわけではない。例えば、抽象的なものは図式で表現できないという限界もある。今後、同形語辞典の作成により様々な工夫が期待される。

### 3.2.6 日中漢語対照研究のまとめ及び限界

第二言語習得研究で、対照分析仮説は強い型と弱い型に分けられている(Wardhaugh 1970)。強い型では、2 つの言語の対照分析によって第二言語習得上の誤りがすべて予測できるのに対し、弱い型では、実際に観察された誤りのうちのどれが干渉によるもののかを確認するのみである。現在、対照分析では弱い型が主流で、今でも応用されている。つまり、現在対照研究は、学習者が誤りを犯す原因を説明する手段の 1 つとして使われている。母語の干渉による誤り以外にも他の干渉による誤りが存在していると考えられている。

日中漢語対照研究は様々な観点から行なわれてきた。それらの研究から、学習者の目標言語である日本語の漢語と母語の中国語で、類似するもの・異なるものと、中国語に存在しないものの分類が明らかとなった。また、同形同義語でも日中で品詞が異なるため、学習者が母語である中国語の品詞に影響され、単語レベルで理解ができても文を正しく産出することができない問題があると示唆されている。そして、個々の漢語を挙げ、日中で意味の違いや意味範囲の異なりなどを明らかにする研究は、中国語母語話者が日本語の漢語を学習する際、どんなものが難しいのかといった難易度の予測に役に立つ。しか

しながら、日中漢語対照研究では日本語の漢語と中国語しか見ていないため、いくら難易度を予想できるといつても、検証が行なわれない限り、必ずしもその難易度が正しいものであるとは限らない。

また言語の違いを学習の難易度と同様に扱っていいかどうかに問題がある。第二言語習得研究では「違いは言語的な概念で、困難さは心理的な概念である」(Ellis 1985 : 31)と述べられている。例えば、日中で意味がまったく異なる「異義語」は対照研究では難しいと予測されている。しかし、日本語で「学ぶこと」という意味を持つ「勉強」という異義語を中国語の「むりやり何かをさせること」という意味に誤解する日本語学習者はまずいない。つまり学習者は一度日本語と中国語の意味の違いを教えられれば誤解しないのではないかと思われる。従って、日中漢語対照研究で明らかになった母語に関する影響の予測を実際に学習者を対象に検証し、その困難さがほんとうに母語によるものなのかを確認しなければならない。

#### 4. 誤用分析研究

この章は中国語を母語とする日本語学習者の実際の誤用を集めて、日本語と中国語の漢語の違いによる誤用分析研究を概観し、諸研究の問題点を探りたい。ここでは章の全体を2つに分けて論じていきたい。1番目は、日本語と中国語の構成要素の違いによる誤りの研究であり、2番目は、日本語と中国語の意味、用法の違いによる誤りの研究である。

##### 4.1 日・中漢語の構成要素の違いによる誤りの研究

日本語と中国語の構成要素の違いに着目した研究は三喜田(2000)である。三喜田(2000)の研究は長期にわたって集めた中国人の作文誤用データを分析したものであり、漢語の意味上の誤りには触れずに語形上の相違による誤りを分類した。その結果、中国人日本語学習者が誤りを起こすパターンは大きく3つにまとめられた。ここではその3パターン誤用例及び、下位分類を取り上げ説明したい。

###### 1.構成語素の数の異なりに起因する誤り

大きく2つのタイプが見られる。

###### ①日本語語彙が中国語語彙より語素の数が少ない。

誤用例:「\*本当に私と日本とは縁分があります。」

日本語では「縁」となるのが普通である。中国語の場合は二字となる。それは日本語語彙が中国語語彙

に比べて、より省略された語彙構造を有するためである。

###### ②中国語語彙が日本語語彙より語素の数が少ない。

誤用例:「私は血型で人の性質は分からんと思ひます。」

中国語語彙が日本語語彙より省略された語彙構造を有するため、日本語では三字の「血液型」としなければならない。

#### 2.構成語素そのものの微妙な異なりによる誤り

三喜田(2000)によると、誤りの原因は、日中で同義或いは類義の関係にある語素の選択が両国語間でたまたま異なり、文字改革などのために一方の語を構成する語素に異なりが生じたりしたことなどのため、両国語間で語素が微妙に異なってしまったものである。

誤用例:「\*父は一週間前出院して、今は元気に仕事をしています。」

日本語では「退院」としなければならない。

#### 3.構成語素の配列順序の異なりによる誤り

三喜田(2000)によると、中国語ではある熟語を構成する語素の配列順序が前後逆になる語も同義の語として同時に存在することが中国語には珍しい現象ではない。また、語素の配列順序が逆でも意味そのものに大差はなく、どちらを用いても違和感が感じることがないようである。誤用の原因もそこにあるとされている。

誤用例、「\*神様はよく私の命運に冗談をされます。」

日本語では「運命」としなければならないが、日本語には「運命」の他に「命運」も存在し、「運命」とは類義関係にあるため誤用されやすい。

日本語と中国語の構成要素の違いによる誤用例が三喜田(2000)によって多く集められたが、それぞれの誤りに対する日中漢語の構成要素の異なりを知ることによって、構成要素による誤りに気付き、防ぐことができるだろう。しかし、集められた誤用例は全ての学習者に現れるものなのか。学習者の努力によって誤りを克服できるものもあれば克服できないものも当然あると思われる。三喜田(2000)の研究で

は、誤用の頻度及び学習者の日本語能力を見ていな。例えば「運命」・「平和」のような、配列順序が中国語と逆になる漢語は実際に使用頻度が高いため、誤用を犯す可能性は低い。また、一回学習すれば正しくできるようになるといった学習効果も含めて考える必要があると思われる。

#### 4.2 日本語と中国語の意味、用法の違いによる誤りの研究

今まで行なわれてきた中国語を母語とする日本語学習者の漢語における誤用研究は、主に意味、用法の誤りを分析した研究であった。例えば、富田(1965)、菱沼(1980)、内田(1992)、今井(1995)、五十嵐(1996)、劉(1997)などによって扱われている。研究の焦点は日本語学習者の誤用にあり、様々な分析を行っているものである。

まず中国語を母語とする日本語学習者の誤用の種類について述べる。今井(1995)によると、誤りには文法上の誤りと語の用法上の誤りという2種類がある。今井は、文法上の誤りは統語面・形態面における類型的な法則上の誤りであり、これに対して語の用法上の誤りは、語の適切な用法を要求する語の用法上の慣習に反した個別的・非類型的な誤りである。つまり、誤用でも性格・系の異なりによって、文レベルの誤りと単語レベルの誤りを識別する必要があるというのが今井(1995)の論点である。

富田(1986)、劉(1997)の研究では、学習者の日本語の漢語の誤用を分類し、論じている。劉(1997)は、学習者の誤用から3つの語(進出、処分、対処)を取り出し、両国の辞書に記載されている意味と用法、また構成された漢字の意味、用法まで詳しく論じている。

菱沼(1980)では、漢字、漢語を媒介とするか、しないかという観点から中国人日本語学習者の誤用例を取り入れながら、母語の干渉を論じている。漢字・漢語を媒介しないものは本稿の目的ではないため、対象から外した。漢語を媒介する場合では、同形語の誤用が挙げられている。例えば、「\*私は工場に分配された。」、「\*最近は仕事が緊張です。」などである。この場合、学習者は<分配>は「配属する、仕事を割り当てる」、<緊張>は「忙しい」という意味で使用しているが、中国語を母語とする日本語学習者が母語に影響され、中国語の意味をそのまま日本語に使ってしまう誤用例である。

内田(1992)は、外国語習得の中間言語の体系が、

学習者の母国言語体系と同じでないために誤用が生じてくると考え、誤用の原因の主なものは「転移」という現象で説明されると述べている。特に文法、構文に関する音声や、テンスなどの誤りを紹介している。漢語の誤用について、中国人日本語学習者にしばしば見られる誤用例をいくつか示す。例えば、「\*～に趣味がある。」(興味があるという意味)、「\*学生たちの性格や気持ちを了解する。」(理解するという意味)などである。

五十嵐(1996)は、中国の大学で日本語を専攻する2年生が行った3分間スピーチの原稿を集め、母語による誤りを分析した。原稿総字数は6871字であり、調査項目は8項目であった。その結果を表6に示す。表6からわかるように、母語の干渉で最も多いのは

表6 母語干渉分析表

項目	干渉	比率(%)
1 中国語語彙の借用		48
2 意義範疇或いは用法のずれ		3
3 指示・疑問詞の誤用		1
4 受身・使役・自発等の誤用		13
5 テンス・アスペクトの誤用		3
6 助詞の誤用		28
7 接続詞の欠如		1
8 直接話法の誤用		3

(五十嵐(1996)をまとめたもの)

「(1)中国語の語彙の借用」によるもの(48%)で、次は「(6)助詞の誤用」(28%)であった。「中国語の語彙の借用」による干渉とは、中国語の字形・意味・用法などである。例えば、「\*改革開放」(「開」→字形による干渉)、「\*信心でいっぱい」(「自信」→意味による干渉)、「\*团结な民族」(「する」→品詞による干渉)などが見られる。五十嵐は、指導方法として学習者に日本語と中国語の違いを気付かせ訂正機会を多く与えることが大事であると主張している。

#### 4.3 誤用分析研究からの示唆及び限界

Corder(1967)によると、第2言語習得に見られる誤りは次の3点の意義を持つ。まず第1は、言語教師に対する貢献である。学習者が目標言語に対してどの程度進歩しているのか、何が学習すべきものとして残っているかを明らかにできる。第2に、研究者にとっての意義である。誤りは言語がどのように習得されるのかという習得過程と、学習者がその言語の発見のためにいかなる方略と手順をとっているのかを明らかにするための証拠を提供す

る。第3に、学習者自身にとっての意義である。誤りは言語習得において欠くことのできないものである。誤りの存在は、学習者が学習を進めていることを自ら確認する助けになる。従って中国語を母語とする日本語学習者の漢語学習の誤りを集め、誤用分析を行うのは有意義であり、学習者側の誤りの訂正に大きな役割を果たしている。また、誤用を類型的に分類し、教育現場において学習者の誤りを犯しやすいところを意識しながら教授することができる。

しかしながら、前にも述べたように誤用分析では、学習者の誤用しか説明できない。つまり学習者言語の変化の過程、即ち第2言語習得過程をうまく説明できない。また言語転移の事実に関する説明が主観的なものになりやすいなどの批判を受けている(長友 1999)。従ってこれから漢語学習研究では、誤用と正用を同時に見なければいけない。また学習者の日本語能力との関係も見る必要がある。そして、漢語学習研究において、中国語を母語とする日本語学習者にとって母語からの干渉は言うまでもなく、「正」の言語転移もある。その両方の影響を究明する研究が待たれる。

## 5. 学習者の中間言語を見る漢語研究

中間言語(Interlanguage)とは、学習者が言語転移

という母語からの影響を受けながらも次第に目標言語に近づいていく過渡的で可変的な自然言語である(長友 1999)。中間言語を検討する際、化石化(Fossilization)という概念が用いられる(Selinker, 1972)。化石化とは、学習者は中間言語に向けて全体的に発達してゆくが、その中においてある項目や規則が不完全なままで発達を止め、そのままの状態で維持されることである。漢語研究においてこれまで行なわれてきた対照研究から、日本語と中国語の言語構造が既に明らかになった。また学習者の誤りを集め、分析した誤用分析研究から中国語を母語とする日本語の漢語習得に起こりやすい誤りも十分論じられていた。しかし、学習者の誤りに焦点を当てるだけではなく、学習者が母語の影響を受けながら目標言語に達するまでの中間言語も見る必要がある。特に漢語の場合、日本語と中国語の構造が極めて類似しているため、上級になってもなかなか消えない化石化という質的研究も必要である。現在、漢語研究も第2言語習得の概念を入れて少しづつ進歩しているよう見えるが、量的研究及び質的研究はまだまだ少ない。そこでこの章では、日中対照研究、誤用分析を土台とし、学習者の中間言語を検証する研究を抜粋し紹介したい。各研究の概要を表7に示す。学習者の中間言語を見る研究は非常に少なかった。

表7 学習者の中間言語を見る漢語習得研究

研究	研究項目	被験者	研究方法	主な結果
馮(1993)	受動文	学習環境、学習年数、滞日年数が異なる中国人日本語学習者	受身マーカー課題、自然さ評定課題	①エラーが減少しない原因是母語の干渉 ②母語と共通部分には促進的影響、相違部分には干渉的影響 ③両言語の受動文の共通する部分より、相違部分にエラーが多い ④中国語受動文の構文文法に従う傾向
馮(1994)	使役文	学習環境、学習年数、滞日年数が異なる中国人日本語学習者	使役マーカー課題、自然さ評定課題	①エラーが減少しない原因是母語の干渉 ②第2言語学習に用いる学習方略には母語の知識が働いている ③中国語の使役文の構文文法に従う傾向
三浦(1997)	同形語	日本人中国語学習者	質問紙	①日本語の意味を判断基準とする ②同形語がある場合、誤りだと判断しない
安(1999)	二字漢語	中国人(CL)と韓国人(KL)日本語学習者	選択肢調査用紙	①KLは母語の影響による誤用と間違った推測による誤用が多い ②CLは間違った推測による誤用が多い
陳(2002)	同形同義語	学習年数、滞日年数が異なる台湾人日本語学習者	自然さ評定課題	①中国語が形容詞、日本語は自動詞として用いるものが最も難しい ②母語の品詞で文を判断する傾向

本章でレビューするものは、主に漢語研究を中心とする。しかし、漢語研究を目的とはしていないが、研究の項目に漢語の項目も含めている馮(1993,1994)の研究、そして中国人日本語学習者だけではなく、韓国人日本語学習者も扱っている安(1999)の研究も取り入れ漢語の項目を検討し、学習者の中間言語における母語の影響を検討したい。

馮(1993, 1994)は、主に対照研究で困難とされてきた受動態と使役形の学習を中国人と日本人の成人を対象とし、調査を行なった。調査で用いられた課題は、まず受動文、使役文の「マーカー選択課題」(例文の空欄に適切な助詞を選択する調査)で、もう1つは、「日本語自然さ評定課題」(例文の自然さを3段階ないし5段階で判定する調査)である。調査用の例文では漢語を含めすべての受動態と使役文が使用されている。受動文で用いられる漢語例文は「感動する」であり、使役文の用例では、「発展する」「成立する」である。馮(1993, 1994)によると、中国語の<感動・発展・成立>は、すべて自動詞としても他動詞としても使われるが、日本語では自動詞としてしか使われない。他動詞として使う場合は、使役形にならなければならない。例えば、

例 1. \*その話は私を感動した。→感動させた。

例 2. \*法案を成立する。→成立させる。

また、中国語の動詞が他動詞の受身形で使われた場合には、日本語の自動詞としての本来の形に対応することになる。例えば、

例 3. \*私はその話しに感動された。→「感動した」にしなければならない。

調査の結果として、受動文、使役文の「マーカー」となる助詞などの選択課題では、学習期間が長くなるに従ってエラーが顕著に少なくなり、ゼロに近づいていることがわかる。逆に「日本語自然さ評定課題」では、エラーの減少が顕著ではなく、長期学習者でもかなりのエラーが見られる。つまり、助詞の

「マーカー」の学習は学習期間が長くなるにつれて進むが、「構文文法」の学習は学習期間が長くなつても母語である中国語の影響を受け続ける。

馮(1993, 1994)によると、母語からの影響は5点にまとめられる。

1. 中国人成人日本語学習者は、日本語の「構文文法」よりも中国語の「構文文法」に従って日本語を学習している。
2. 母語の影響は「促進的影響」(共通部分)と「干渉的影響」(相違部分)に分けられる。
3. 母語の干渉は学習期間が長くなっても容易にはなくならない。つまり、化石化が起こる原因の一つと考えられる。
4. 学習者にとって母語にないが第二言語にある表現がより困難である。
5. 第2言語の正しいインプットは必ずしも正しいアウトプットにつながるとは限らない。

意味範囲を究明する研究を学習者に応用し、その影響を明らかにした研究は、三浦(1997)であった。この研究では日中同形異義語を4つのタイプに分類し、仮説を立て、日本語を母語とする中国語学習者37名(週1コマ、2年以上学習した)を対象にし、調査を行なった。日中同形同義語の4タイプ及び仮説は次の通りである。

- (1)日本語と中国語の意味がほぼ同じもの。  
(「日=中」) → 学習者はあまりエラーを出さない。
- (2)日本語と中国語の意味が全く違うもの。  
(「日≠中」) → 既習者(経験のある者)はあまりエラーを出さない。
- (3)中国語の意味範囲のほうが広いもの。  
(「日<中」) → 日本語訳をするときにエラーを出さない。
- (4)日本語の意味範囲のほうが広いもの。  
(「日>中」) → 中国語訳をするときにエラーを出しやすい。」

(三浦 1997:90)

また、質問用紙は2枚とし、一枚は中国語の文に対する適切な日本語訳を4つの選択肢の中から選ぶもので、もう一枚は反対とする。質問は8問で4タイプそれぞれ2問ずつ出題した。分析方法として、4タイプのエラー率の、各タイプの質問のエラー率、また、各タイプにエラー率が一番高かった質問の選択肢のエラー率を分析した。

その結果、すべての仮説が証明された。三浦(1997)によると、4つの仮説による考察は以下の通りである。

仮説1、日本文内にある同形語に適する中国語訳を選ぶとき、その同形語の中国語における意味を

判断の基準にするのではなく、日本語における意味を判断の基準にして選ぶ。

仮説2、日本文に適する中国語訳を選ぶとき、選択肢としてあげられた中国語の語彙(同形語)の日本語訳を知らないまま、その言葉の日本語における意味から判断して選ぶ。

仮説3、中国文を日本語訳するときに同形語が入っていると、同形語をそのまま日本語に置き換えてできた誤訳でも日本文として成立するならば、学習者は誤りだと判断しないことがわかった。

仮説4、日本文を中国語訳するときに同形語が入っていると、同形語をそのまま中国語に置き換えて、日本語では使用できるが中国語では使用できない範囲でそれを用いてしまう。

三浦(1997)は日本語を母語とする中国語学習者が中国語を学習するとき、同形語の意味の相違がどのような場合であっても様々な形で母語の影響を受けていると主張している。しかし、その研究で対象とした日本人は、週1コマで2年以上中国語を学習したものもあるが、学習者の中国語レベルはわからない。また、同形語の選択基準にも問題があり、その語が既習であるのかどうかわからない。従って、より厳密な研究計画や調査が必要とされる。

安(1999)の研究では、分類研究でされてきた漢語について日本語(J)、韓国語(K)、中国語(C)の3つの言語の対応関係を検証している。まず、日本語の漢語を「J=K=C」、「J=K≠C」、「J≠K=C」、「J≠K≠C」<sup>2</sup>という4つの類型に分類し、12問の用例を作り、中国と韓国で勉強する初・中級の学習者を対象し、調査を行なった。その結果、「J=K=C」型の漢語は、誤用の種類と誤用率が中、韓で異なることが特徴的であった。例えば、韓国人学習者には「握手」→「取手」の誤用が多いが、中国人学習者は「執手」の誤用が多い。安(1999)によると、韓国は普段あまり漢字を使っていないからであるという。中国人の場合では、中国語の漢字の意味から「手をとる」という動作を想像しにくいが、「執」の漢字からは比較的連想しやすいと説明している。「J=K≠C」型の漢語では全体的に正用率が高い。つまり韓国人学習者・中国人学習者ともに母語を用いたことによる誤用と、誤った推測による誤用の間に差がないといことである。また「J=K≠C」型の漢語では初級の場合、中国人学習者に比べ韓国人学習者のほうが誤った推測によ

る誤用が多い。「J≠K=C」型の漢語も、全体の正用率が高く、中・韓の学習者とともに母語による誤用が見られなかった。そして「J≠K≠C」型の漢語は正用率が低い。韓国人は韓国語を用いたことによる誤用が多く、中国人学習者には母語と関係なく、間違った推測による誤用が多いと述べられている。

安(1999)の研究では、学習者の誤用を母語を用いた誤用によるものと、誤った推測による誤用としたが、どうしてその選択肢を選ぶのかについての説明が不十分である。例えば、「J≠K≠C」型の漢語で中国人学習者・韓国人学習者ともに「単位」→「学点」に誤用が集中した原因の説明について、韓国人学習者は韓国語(「学点」)による誤用で、中国人学習者は誤った推測をしたためと説明されているが、具体的な原因には触れていない。

陳(2002)の研究は日中同形同義語の品詞のずれ研究を用いて台湾人日本語学習者の漢語学習を調査したものである。同形同義語の品詞による違いを6タイプ、64項目にまとめ、日本人群、台湾人長期学習・滞在群(学習歴:平均8年3ヶ月、滞在期間:平均5年9ヶ月)、短期学習・滞在群(学習歴:平均3年、滞在期間4ヶ月)の3つの群に分け、調査を行なった。結果としては、次の通りであった。

- ①台湾人日本語学習者は、日中同形同義語を学習するとき、日中同形同義語の品詞の違いによる6タイプの文の中で、中国語は形容詞で日本語は自動詞で用いられるものが最も困難であることが検証された。
- ②台湾人日本語学習者は、日中同形同義語を学習するとき、母語の品詞に従って日本語として不自然な文を自然と判断する傾向がある。
- ③台湾人日本語学習者は日中同形同義語を学習するとき、学習年数、滞日年数が経つにつれ、学習がより進むが、完全にマスターできるとは限らない。

以上、日中漢語対照研究及び誤用分析研究から一步前進した学習者の中間言語研究をレビューした。それらの研究から漢語習得における様々な母語の影響が確認された。中国語を母語とする日本語学習者の漢語学習において、特に中国語の品詞で日本語の品詞を判断するといった母語の影響が確認された。

中間言語研究とは、学習者の習得過程上に起こる様々なパフォーマンスを正視し、学習者が産出した全ての言語を対象とすることを目指すものである。

今後、中間言語研究の立場にたった漢語習得研究が待たれる。

## 6. 言語心理学における漢語研究

最近言語心理学で漢語の書字・音韻・意味が学習者の学習にどのような影響を与えるのかという研究が次々とされている。そこで本章では、中国語を母語とする日本語の漢語習得に関する研究を取り入れ、対照研究や、誤用分析で説明できない中間言語のメカニズムを言語心理学の研究を通して探り、漢語学習のメカニズムを考察してみたい。

羽渕他(2000)によると、バイリンガルの研究では、単語の処理モデルが2つあると指摘されている。1つは、単語連結モデルで、つまりL2の単語はL1の単語と連合して意味に到達するというものである。もう1つは概念媒介モデルで、語彙表象間の直接連結はないが、両言語は概念表象を媒介として結びついているというものである。

単語連結モデルによると、L2の単語は書字または音韻レベルでL1が強く影響することで、概念媒介モデルでは、L2の学習が進むにつれて、L2から直接意味に結びつく概念媒介へ変わっていく(玉岡2002)。実際に習熟度が高くなるにつれて概念媒介モデルに沿って処理が行われている報告がすでに出ており(Chen & Ho 1986)。それを漢語の学習で検証する研究は、茅本(1996, 2000)、玉岡(2001, 2002)がある。

茅本(1996, 2000)は、中国語を母語とする日本語学習者における日本語の漢字の認知と、日中漢字の形態・音韻的差異が中国語母語話者による日本語の漢字の読みに及ぼす影響を検証した。その結果、学習者は漢字を見て日中の音韻情報を活性化したことが明らかになった。また、超上級者は母語の音韻情報の影響が見られなかった。そして玉岡(2001)は中国語を母語とする超上級の日本語学習者を対象し、漢字の認知における母語の影響を検証した。その研究では次の4つの実験が行なわれた。それは、次の通りである。

- ①書字の影響: 日本語の漢字二字熟語で中国語の書字と同じ条件、左側の漢字の一部または全体が異なる条件、左右の漢字が異なる条件で語彙正誤判断の時間及び誤答率を測る。
- ②音韻の影響: 中国語と日本語で発音が類似している条件、やや異なる条件、及び大きく異なる条件、

る条件で発音するまでに要する時間と誤答率を測る。

- ③意味の影響: 中国語と日本語で意味が同じ条件、両言語で意味が異なる条件、日本語のみ意味が存在する条件、両言語で全く意味をなさない条件を設定し、語彙正誤判断の時間及び誤答率を測る。

- ④中国語としての意味判断(実験③に同じ)である。

その結果、音韻的な類似性及び書字的な類似性は、超上級の中国語系日本語学習者において、日本語の漢字処理に影響しないことが明らかになった。両言語における意味的な類似と相違については、非常に強い干渉(日本語に存在するが、中国語に存在しない場合の否定が両言語に存在しない場合より遅かった。)と促進(両言語に意味的に存在する漢字熟語は中国語だけに存在する熟語よりも迅速に処理された。)が実験で観察された。従って、中国語系日本語学習者が最も強く影響を受けるのは、漢字の音や、形の類似性ではなく、意味的な類似性であると言える。玉岡(2002)はさらに学習者が二字漢字熟語を認知する心的辞書のモデルに基づいて研究を行った。結果として、単語レベルの漢語であっても日本語のレベルが超上級に達すると、書字的表象群と、音韻的表象群が中国語と日本語で独立して分離していることが明らかになった。従って超上級学習者は単語連結処理ではなく、意味媒介処理を行っていると考えられる。

また、台湾人日本語学習者を対象し、台湾人の漢字熟語の処理経路について検証する研究に邱(2000)がある。その結果、中国語と形態及び意味が同じようなタイプの単語は日本語音を媒介せずに意味アクセスしていた。中国語と形態が異なる非同根語は日本語音を媒介して意味アクセスする傾向があることが明らかになった。

さらに言語背景を異なる学習者を対象とする研究もされている。玉岡(1997)は、中国語系の日本語学習者と英語系の日本語学習者を対象とし、仮名と漢字の語彙処理について比較した。その結果、英語系日本語学習者が仮名を基本とする音韻的符号化による処理に語彙判断を依存しているのに、中国語系日本語学習者では、漢字の書字的符号化に大きく依存している結果が得られた。

Mori(1998)では、表音文字(英語母語話者)と表意文字(中国・韓国学生)を背景に持つ学習者を対象とし、漢字の短期記憶について検討した。結果は、表

音文字背景をもつ被験者は、記憶するとき音に頼っているのに対し、表意文字背景をもつ被験者は書字情報に頼って処理していた。

以上言語心理学の先行研究から、中国語を母語とする日本語学習者にとってレベルが上がるにつれ中國語から日本語へのアクセスは意味媒介処理を行っていることがわかった。形態と意味が同じような同形同義語も音を媒介せず意味アクセスすることがわかつた。

漢語学習のメカニズムが明らかになるとよって教育現場に還元できるものは、教授法やモジュール化<sup>3</sup>の提案である。松下(2002)は、中国語を母語とする日本語学習者のために語彙先行モジュールを提案した。彼によると、中国人学習者にとって漢字語の学習は既存の認知スキーマを利用する学習である。中国語を母語とする日本語学習者がそろっている環境においては、日本語の語彙学習をモジュール化し、特に初級後半から文法学習進度よりも先行して語彙学習を進めるのが効果的だと主張している。

## 7.まとめと今後の課題

以上、中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得を対照研究→誤用分析→中間言語研究・言語心理学の流れで概観した。これまでの研究から、漢語の習得において、母語の影響が無視できず、逆にもっと研究されるべきであることがわかった。これまでの研究では母語の影響があることは確認されたが、母語の影響は様々であり、干渉するものもあれば促進するものもあるとされている。また干渉影響のような負の転移といった場合、その転移のレベルが異なり、長く残るものと一瞬しか残らないものがある。正の転移を教育に応用すべきものであり、教授法や教材などに取り入れられれば学習者に役立つであろう。

中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得研究において、これまでの研究から明らかになった母語によって影響しうるものをまずきちんと検証することが大事であると思われる。次のステップとして、検証された母語の影響は母語のどの特徴によるものなのか、またその他の要因も探ることが考えられる。そして最後のステップとしては、教育現場と学習者に還元できる方法を考えることである。

現在、中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得研究はまだ母語の影響を確認する段階である。そ

の段階において、以下の研究が早急に必要である。

まず、日本語の漢語はすでに日中対照研究で同義語、類義語、異義語、そして欠落語という4タイプに分けられ、数及び意味・用法の違いが研究され、難易度も予測されている。しかし、その難易度を検証する研究はなかった。従ってその難易度の検証及び、困難の要因を探る研究が必要である。

誤用分析研究は学習者の誤用しか見ていないため、全体像をとらえきれないという批判がある。しかし、これまでの漢語習得における誤用分析研究では、漢語の意味・用法以外のもの、例えば、音韻や字形なども含めて分析した研究が多い。また漢語の意味・用法に焦点を当て、作文や会話などのデータを収集し、分析したものは少なかった。学習者が漢語習得において犯す意味・用法のすべての誤用がまだ十分に把握できていない。従って、学習者の正用も含めて学習者の誤用及び正用の実態研究も必要である。

そして、漢語の習得研究では漢語は単語レベルのものと取られやすいが、学習者の漢語産出過程を見ると、単語レベルで産出されるのではなく、文というレベルで産出されている。単語レベルで正しく理解し、使用できても、文レベルになると誤用が発生する場合がある。例えば、「発展」という漢語の理解・使用に問題がなくとも、文レベルでは「\*経済を発展する」という誤用が生じる。従って、文レベルの漢語習得の研究も必要である。

さらに中間言語の化石化(fossilization)、そして実験心理学的な漢字の認知処理の研究といった視点の研究もこれから必要とされる。

### 注

- 「」は日本語を指している。<>は中国語を指している。
- 「=」は同じ意味、( )は用いられる言語  
「J=K=C」型 例:はじめての人とは「握手(J,K,C)して挨拶をします。  
「J≠K=C」型 例:新入社員の「給料(J,K)、薪水(C)」は一ヶ月 15万円です。  
「J≠K=C」型 例:試験に失敗した「自分(J)、自己(K,C)」を慰める。  
「J≠K≠C」型 例:卒業するためには何「単位(J)、学点(K)、学分(C)」必要ですか。
- 松下(2002)によると、言語学習を構成する一部分として独立して学習を進めることである。

## 参考文献

- 阿久津智(1990)「漢字圏の学生に対する漢字教育について」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』6, 129-144.
- 荒川清秀(1979)「中国語と漢語—文化庁『中国語と対応する漢語』の評を兼ねて」『愛知大学文学論叢』61, 1-28.
- 荒川清秀(1988)「複合漢語の日中比較」『日本語学』5, 56-67.
- 荒川清秀(1998)「日本漢語の中国語への流入」『日本語学』5, 39-46.
- 荒川清秀・那須雅之(1992)「中国語の想造語力—二字漢語を中心にして」『日本語学』5, 75-85.
- 安龍洙(1999)「日本語学習者の漢語の意味の習得における母語の影響について—韓国人学習者と中国人学習者を比較して—」『第二言語としての日本語の習得研究』3, 5-17.
- 石堅・王健康(1983)「日中同形語における文法的ズレ」『日本語・中国語対応表現用例集』5, 56-82.
- 五十嵐昌行(1996)「表現(日本語)時の母語干渉—山東大学語言文学系事例報告」『日語学習与研究』3, 41-43.
- 今井喜昭(1995)「いわゆる“誤用”的問題について」『日語学習与研究』3, 24-26.
- 石橋玲子(2002)『第2言語習得における第1言語の関与—日本語学習者の作文産出から』風間書房
- 内田万里子(1992)「日本語と中国語—中国人学習者への日本語教育のために—」『京都外国语大学留学生別科』1, 42-52.
- 大塚秀明(1990)「日中同形語について」『筑波大学外国语教育論集』12 筑波大学外国语センター, 327-337.
- 邱学瑾(2000)「台湾人日本語学習者における日本語漢字熟語の処理について」『中国四国心理学会論文集』33, 16.
- 邱学瑾(2002)「台湾人日本語学習者の漢字熟語の音韻処理にみられる単語タイプの効果」『2002年日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会, 219-220.
- 桐原ユニ(1997)『第2言語習得研究』桐原書店
- 金若静(1987)『同じ漢字でも これだけ違う日本語と中国語』学生社
- 国立国語研究所(1983)『語彙の研究と教育(上)』 大蔵省印刷局
- 黄正浩(1994)「漢字語彙の日中朝対照研究」『講座日本語教育』29 pp.334-358
- 小柳かおる(1998)「米国における第二言語習得研究動向：日本語教育へ示唆するもの」『日本語教育』97, 37-47.
- 侯仁峰(1997)「同形語の品詞の相違についての考察」『日本学研究』6 北京日本学研究中心, 78-88.
- 周錦樟(1986)「日中漢語対応の問題—文化庁『中国語と対応する漢語』について」『日本語日本文学』12 輯樟輔仁大学外語学院 日本文学系, 69-89.
- 周建(1983)「中日語彙対照—同素異順語について」『中華人民共和国日本語研究センター紀要 日本語教育研究論叢』3 国際交流基金, 19-23.
- 沈國威(1993)「現代中国語における日本製漢語」『日本語学』7, 41-49.
- 茅本百合子(1996)「日本語漢字と中国語漢字の形態的・音韻的差異が中国語母語者による日本語漢字の読みに及ぼす影響」『広島大学教育学部紀要』第二部 45 広島大学教育学部, 345-351.
- 茅本百合子(2000)「日本語を学習する中国語母語話者の漢字認知—上級者・超上級者の心内辞書における音韻情報処理—」『教育心理学研究』, 315-322.
- 戚国福(1999)「日本語二字漢語動詞の意味と用法—中国語との対照を中心に—」東吳大学日本語文学系修士論文
- 竹中憲一(1988)「中国語と日本語における字順の逆転現象」『日本語学』10, 55-64.
- 武部良明(1967)「漢字語彙の理解について」『日本語教育』10, 2-14.
- 武部良明(1979)「漢字国民に対する中級漢字教育」『日本語教育』37, 13-23.
- 玉岡賀津雄(1994)『仮名と漢字による語彙処理のメカニズム—日本語学習者の学習歴と言語背景による影響』松山大学総合研究所
- 玉岡賀津雄(1997)「中国語と英語を母語とする日本語学習者の漢字及び仮名表記語彙の処理方略」『言語文化研究』17-1, 65-77.
- 玉岡賀津雄(2002)「日本語漢字の理解課程における中国語系日本語学習者の母語の影響」『平成12年～平成13年度科学研究補助金(基盤研究 C□1)研究成果報告書 研究課題番号—12680305』96-105.
- 玉岡賀津雄(2002)「日本語学習者の心的辞書(mental lexicon)の構造—中国語を母語とする超上級日本語学習者の漢字熟語の処理を例に—」『日本語教育学会・中国地区研究集会予稿集』1-8.
- 張淑榮(1987)『中日漢語対比辞典』ゆまに書房
- 趙福堂(1983)「關於中日同形詞的比較」『日語学習与研究』4, 94-96.
- 陳毓敏(2002)「日本語二字漢字語彙とそれに対応する中国語二字漢字語彙は同じか。—台湾及び中国の中国語との比較」『言語文化と日本語教育』24 お茶の水女子大学日本言語文化学研究会, 40-53.
- 陳毓敏(2002)「中国語を母語とする日本語学習者における漢語習得—同形同義語の文法的ズレに焦点を当てて—」『2002年日本語教育学会秋季大会予稿集』, 63-68.
- 中川正之(1985)「日本語と中国語の対照研究—日中語対照研究会の紹介を兼ねて—」『日本語学』7月号, 94-104.
- 中川正之(1992)「特集・外から見た日本語 語構成」『月刊言語』21-1 大修館書店, 28-33.
- 中川正之(1992)「類型論から見た中国語・日本語・英語」大河内康憲編集『日本語と中国語の対照研究論文集』(上) くろしお出版 3-21.
- 中川正之(1995)「単語の日中対照」『日本語学』5, 64-71.
- 長友和彦(1999)「第2言語としての日本語習得に関する総合研究」『平成8年度～平成10年度科学研究費補助金研究成果報告書』基盤研究(A)(1)課題番号 08308019

- 研究代表者 カッケンブッシュ・寛子 9-41.
- 長友和彦(2000)「第二言語習得研究に基づくシラバス・デザインのあり方」『日本語教育通信』37, 14-15.
- 望月八十吉(1974) 『中国語と日本語』 211-225.
- 富田隆行(1965)「中国語と日本語—中国語と日本語の漢字は同じではない—」『日本語教育』7, 9-71.
- 畠佐由紀子(2003)『第2言語習得研究への招待』くろしお出版 47-65
- 菱沼透(1980)「中国語と日本語の言語干渉—中国人学習者の誤用例—」『日本語教育』42, 58-72.
- 飛田良文・呂玉新(1986)「『中国語と対応する漢語』を診断する」『日本語学』6, 72-84.
- 文化庁(1978)『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
- 彭飛(1998)「日本語と中国語の対照研究が抱える諸問題をめぐって(1)」『無差』5, 27-44.
- 松下達彦(2002)「中国語を母語とする日本語学習者のための語彙学習先行モジュールの提案—第2言語習得理論、言語認知、対照分析、語彙論の成果を踏まえて—」『日語学習与研究』108, 50-55.
- 松見法男(2002)「言語における知識と運用—「わかる」と「できる」の違い 誤用はなぜ起きるのか?」『第2言語習得研究会全国大会予稿集』32-37.
- 三浦久美子(1997)「日中同形語が学習者に与える影響—日本人の中国語学習者を対象にして」『言語文化』6 愛知淑徳大学言語文化学会 89-96.
- 三浦昭(1984)「日本語から中国語に入った漢語の意味と用法」『日本語教育』53, 102-112.
- 三喜田光次(2000)『ここが違う日本語語彙と中国語語彙』天理大学出版部
- 潘鈞(1995)「中日同形詞詞義差異原因浅析」『日語学習与研究』3, 19-23.
- 馮富榮(1993)「日本語受動文の学習過程における母語—中國語の影響について」*Japanese Journal of Educational Psychology*, 41, 388-398.
- 馮富榮(1994)「日本語使役文の学習過程における母語(中国語)の影響について」*Japanese Journal of Educational Psychology*, 42, 324-333.
- 馮富榮(1999)『日本語学習における母語の影響—中国人を対象として』風間書房
- 羽渕由子・松見法男(2000)「第2言語の単語処理モデルの動向」『広島大学教育学部紀要 第二部』49, 171-177.
- 宮島達夫(1993)「日中同形語の文体差」『阪大日本語研究』5, 1-18.
- 守屋宏則(1979)「資料—日中同形語—その意味用法の差違—」『日本語学校論集』6, 159-168.
- 劉珂(1997)「日本語の中の二、三の漢字語彙について—中国人に対する“母国語対比”授業で考えたこと—」『拓殖大学日本語紀要』7, 175-186.
- 柳納新(1997)「關於日漢同形近義詞(上)」『日語知識』6, 22-25.
- 柳納新(1997)「關於日漢同形近義詞(下)」『日語知識』7, 23-25.
- 林姿里(1982)「日中両語における同形語についての一考察—二字漢語を中心に」 東吳大学日本語文学系修士論文
- 林成虎(1998)『中日同形異义詞辨析』延邊大学出版社
- 吉岡薰(1999)「第2言語としての日本語習得研究—現状と課題—」『日本語教育』100, 19-32.
- Corder, S. P. (1967) The significance of learner's errors. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching* 5, 161-170
- Chen, H.-C., & Ho, C. (1986) Development of stroop interference in Chinese-English bilinguals. *Journal of Experimental Psychology: Learning, memory, and Cognition*, 12, 397-401
- Eckman, F.R. (1977) Markedness and contrastive analysis hypothesis. *Language Learning* 27, 315-330
- Mori, Y. (1998) Effects of first language and phonological accessibility on Kanji Recognition. *The Morden Language Journal*, 82, 69-82.
- Mori, Y. (1998) Individual differences in the interpretation from context and word parts in interpreting unknown kanji word. *Applied Psycholinguistics*, 23, 375-397

ちん ゆみん／お茶の水女子大学大学院 応用日本言語論講座  
yumin55@hotmail.com

# Learning the meaning and usage of Kanji compound words: A review of Japanese Kanji compound words as acquired by native Chinese speakers

CHEN Yumin

## Abstract

In recent years Japanese as a second language has become a popular field of research. The learning of Japanese Kanji compound words by native speakers of Chinese started with comparison based analysis. Advances in the field led to the focus on commonly misused phrases. Eventually a balanced combination of these two areas supported a curriculum for more rapid attainment. To date studies have proved that Chinese speakers are greatly influenced by their native language, while learning Japanese kanji compound words. Current studies have only just begun to inspect the various influences of the native language.

The purpose of this study is to review and understand the meaning and the usage of Japanese kanji compounds words as acquired by native Chinese speakers. Other themes include related contributing factors in learning a second language. In addition, the problems and limitation with previous studies are uncovered. Finally, suggestions are made for possible future directions of study on the topic to keep the acquisition of Kanji moving forward.

【Keywords】second language acquisition, Kanji compound word, L1 transfer, verification

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)